# 金子「北狭山茶場碑」について

| 整理番号 | 題額 | 題額揮毫 | 碑記撰文 | 碑記揮毫 |
|---|---|---|---|---|
| 入間〇五 | 北狭山茶場碑 | 清浦圭吾 | 重野安繹 | 松本英一 |

| 鐫刻 | 撰文建碑年 | 住所 | 場所 | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| 笠井敬三 | 一八八七・明治二〇<br>一九三六・昭和一一 | 金子新久 | 龍円寺 | |

## 一．はじめに

明治維新後、海外との貿易が本格化すると、初期の主な輸出産物は、絹糸と茶であった。そこで、銘茶を産すると誇る狭山の地で、それを顕彰する石碑が三基建てられた。本石碑はその三番目のものとして、金子郷で構想され、明治二十年に、重野安繹が撰文した碑文が完成した。ところがどういう経緯かは不明だが、建碑に至らず、長く筐底にあった。それが、昭和十一年に至り、清浦奎吾の題額を得、松本英一が碑文を揮毫して「北狭山茶場碑」が金子郷に建碑されるに至った。

〇写真１　石碑正面（やや右側から）

○写真２　篆額

○写真３　「碑記」部分

## 二、翻刻並びに訳注

■翻刻

●題字（篆書体）

碑場茶山狹北

●碑記

北狹山茶場碑　　從二位勲一等伯爵清浦奎吾題額

歳乙酉余奉文書採訪之命巡歴關左八州自武之河越西南沿入閒川至八王子途上茶樹欝葱彌望無際問之則狹山茶場也有二長阜相對南曰狹山其麓宮寺郷有十餘村北曰金子山其麓金子郷又有十餘村人戸凡二千餘皆業茶總稱之曰狹山狹山茶瀹之色緑洋人尤愛之稱曰緑茶凡關左之茶輸海外者多冒狹山名猶畿甸之茶行海内者冒宇治云先是金子郷茶戸某某乞余撰茶場碑文諾而未果至是親覩其場之盛又相其地形入閒多摩二川流其左右後則御嶽山脈連秩父前面平野三四里至河越地勢漸下土沃泉清水靄晻曖此其所以産名茶然嘗攷之本邦各地大抵皆宜茶唯其培養製造之異法故品有高下耳不然五畿八道豈無地形土性之類宇治狹山邪宇治狹山之所以冠諸州以培養製造之得宜也使諸州竭力於培養製造如宇治狹山而積以年歳其馳譽於中外何減宇治狹山宇治狹山或自恃而少怠則一朝聲價居諸州之下亦不可知盖宇治之茶剏于七百年前狹山繼之中閒衰廢其再興又在百許年

終致今日之盛殖産之難如此語云成難敗易不其然乎初天保年間宮寺郷人乞林祭酒撰碑建之其山上近又乞敬宇中村氏文與前碑相並於是金子郷人剞余文其山麓題曰北狹山茶塲之碑二郷同在狹山中猶人家之有同宗相競赴事不墜家聲以禦外侮在乎二郷之人勉之焉耳矣茶場之所以廢興與我茶之所以大售於海外二氏之文盡之故不復及其辭曰

武之野兮名於月武之山兮武尊略野曠莫兮嘉卉茁山嶂崒兮靈泉沸泉洌兮壤沃緑葉兮馥郁盧陸兮饜嗜欲猗卓兮貨之殖違帝闕兮咫尺望巨罍兮船舶馬飈疾兮車電擊千箱萬服兮出無極

明治二十年十二月　　正四位勳四等文學博士重野安繹撰

昭和十一年十月建之　　松本英一書

＊異体字など

○從　從。　○歳　歳。　○茶　茶。　○塲　場。　○宮　宮。　○此　此。　○所　所。　○高　高。　○於　於。　○盖　蓋。

○年　年。　○敬　敬。　○剞　刻。　○辭　辭。

■**訳注**

●**本文**（いわゆる旧字体とし、一行毎に改行した）

北狹山茶場碑

從二位勲一等伯爵　清浦奎吾題額

歳乙酉、余奉文書採訪之命、巡歴關左八州。
自武之河越、西南沿入閒川、至八王子。
途上、茶樹蘙葱、彌望無際。
問之、則狹山茶場也。
有二長阜相對。
南曰、狹山、其麓宮寺郷、有十餘村。
北曰、金子山、其麓金子郷、又有十餘村。
人戸凡二千餘、皆業茶。
總稱之曰狹山。
狹山茶、瀹之色緑。
洋人尤愛之。
稱曰、緑茶。
凡關左之茶、輸海外者、多冒狹山名。
猶畿甸之茶、行海内者、冒宇治云。
先是、金子郷茶戸某某、乞余撰茶場碑文。
諾而未果。
至是、親覩其場之盛。
又相其地形、入閒多摩二川、流其左右。
後則御嶽山脈連秩父、前面平野三四里、至河越。地勢漸下、土沃泉清、水靄晻曖。
此其所以産名茶。
然嘗攷之、本邦各地、大抵皆宜茶。唯其培養製造之異法、故品有高下耳。
不然、五畿八道、豈無地形土性之、類宇治狹山邪。
宇治狹山之所以冠諸州、以培養製造之得宜也。
使諸州竭力於培養製造、如宇治狹山、而積以年歳、其馳譽於中外、何減宇治狹山。
宇治狹山或自恃而少怠、則一朝聲價居諸州之下、亦不可知。
蓋宇治之茶、剏于七百年前、狹山繼之。中閒衰廢、其再興又在百許年、終致今日之盛。
殖産之難、如此。
語云、成難敗易。
不其然乎。
初天保年閒、宮寺郷人、乞林祭酒撰碑、建之其山上。
近又乞敬宇中村氏文、與前碑相並。
於是、金子郷人、刻余文其山麓、題曰北狹山茶場之碑。
二郷同在狹山中。
猶人家之有同宗、相競赴事、不墜家聲、以禦外侮。
在乎二郷之人、勉之焉耳矣。
茶場之所以廢興、與我茶之所以大售於海外、二氏之文盡之。

故不復及。
其辭曰、
武之野兮名於月、
武之山兮武尊略。
野曠莫兮嘉卉茁、
山崖崒兮靈泉沸。
泉洌兮壤沃、
緑葉兮馥郁。
盧陸兮饜嗜欲
猗卓兮貨之殖。
違帝闕*兮咫尺、
望巨嶴兮船舶。
馬飈疾兮車電擊、
千箱萬服兮出無極。

明治二十年十二月、
正四位勲四等文學博士重野安繹撰。
昭和十一年十月建之。
松本英一書。

＊「文集」作「闕」。

## ●訓訳

北狹山茶場碑。
從二位勲一等伯爵清浦奎吾題額。

歳乙酉、余、文書採訪の命を奉じ、關左八州を巡歴す。
武の河越より、西南して入間川に沿ひて、八王子に至る。
途上、茶樹蘮葱として、彌望際(きは)無きあり。
之を問へば、則ち狹山茶場なり。
二長阜ありて、相ひ對す。
南を狹山と曰ひ、其の麓の宮寺郷に十餘村有り。
北を金子山と曰ひ、其の麓の金子郷にも又た十餘村有り。
人戸凡そ二千餘、皆な茶を業とす。
之を總稱して狹山と曰ふ。
狹山の茶は、之を瀹(ゆ)づれば色は緑なり。
洋人尤も之を愛す。
稱して緑茶と曰ふ。
凡そ關左の茶、海外に輸する者は、多く狹山の名を冒(をか)す。
猶ほ畿甸の茶の、海内に行はるる者の、宇治を冒すがごとしと云ふ。
是より先、金子郷の茶戸某某、余に茶場碑の文を撰せんことを乞ふ。

諾として而も未だ果さず。
是に至り、親しく其の場の盛んなるを覩る。
又た其の地形を相るに、入間多摩の二川、其の左右に流る。
後ろは則ち御嶽山脈の秩父に連なり、前面は平野三四里、河越に至るまで地勢漸く下る。
土は沃にして泉は清く、水靄晻曖たり。
此れ其の名茶を産する所以なり。
然りして之を嘗み攷ふ、
本邦の各地、大抵皆な茶に宜し。唯だ其の培養製造の法を異にす、故に品に高下有るのみ。
然らずんば、五畿八道、豈に地形土性の、宇治狭山に類するもの無からんや。
宇治狭山の諸州に冠たる所以は、培養製造の宜しきを得るを以てなり。
諸州をして力を培養製造に竭くすこと、宇治狭山の如くして、而も積むに年歳を以てせしむれば、其の譽を中外に馳すること、何ぞ宇治狭山に減ぜんや。
宇治狭山或ひは自ら恃みて少しく怠れば、則ち一朝にして聲價の諸州の下に居ること、亦た知るべからず。
蓋し宇治の茶は、七百年前に剏まる。
狭山之に繼ぐも、中間衰廢せり。
其の再興は又た百許年に在りて、終に今日の盛を致す。
殖産の難きこと、此くの如し。
語に云ふ、
「成るは難く、敗るるは易し」と。
其れ然らざらんか。
初め天保年間、宮寺郷の人、林祭酒に碑を撰することを乞ひ、之を其の山上に建つ。
近ごろ又た敬宇中村氏に文を乞ひ、前碑と相ひ並ぶ。
是において、金子郷の人、余の文を其の山麓に刻し、題して北狭山茶場の碑と曰ふ。
二郷は同に狭山の中に在り。
猶ほ人家の同宗有りて、相ひ競ひて事に赴き、家聲を墜とさず、以て外侮を禦ぐがごとし。
二郷に在るの人、之を勉めんのみ。
茶場廢興の所以と、我が茶の大いに海外に售るる所以とは、二氏の文、之を盡くせり。
故に復た及ばず。
其の辭に曰く、
武の野は月に名ありて、
武の山は武尊、略すといふ。
野は曠莫として、嘉卉、茁き、
山は崔　崒として、靈泉、沸く。
泉は洌にして壤は沃に、
緑葉、馥郁たり。
盧陸も、嗜欲に饜き、
猗卓の貨殖せり。
帝闕を違ること咫尺にして、
巨罍に船舶を望む。
馬は飈　疾として、車は電擊たり。

千箱萬服、出だして極まり無し。

明治二十年十二月、
正四位勳四等文學博士重野安繹、撰す。
昭和十一年十月、之を建つ。
松本英一、書す。

**●人物**

○清浦奎吾　嘉永三（一八五〇）年から昭和十七（一九四二）年。熊本の僧侶の家に生まれる。日田の咸宜園で学び、野村盛秀と知遇となる。明治五年上京すると、埼玉県令であった野村の勧めで、埼玉県で教職に就く。同九年に司法省に転じ、司法・内務官僚として活躍した後に貴族院議員となる。司法大臣、枢密院議長等を歴任し、大正十一年には総理大臣となる（在任六ヶ月）。その後は重臣として国事に関与した。位階勲等爵位は従一位大勲位伯爵。この篆額を書いたのは、石碑を建てる直前だろう。昭和十一年は、八十七歳。

○林祭酒　祭酒は、祭祀饗宴において神に酒を捧げる係。祭や宴の主。転じて、教育研究機関の長官、主任教授。ここでは昌平黌教授。林煌（あきら）（寛政十二（一八〇〇）年から安政六（一八五九）年）。林家八代述斎の第六子で、嘉永六（一八五三）年に本家を相続し、大学頭を名乗り、復斎と号した。「重闢茶場碑」を撰文した。

○敬宇中村氏　中村正直（天保三（一八三二）年から明治二十四（一八九一）年）。字は敬輔、号は敬宇。江戸幕府同心の子として生まれ、昌平坂学問所寄宿寮に入り、佐藤一斎に儒学を、箕作圭吾に英語を習った。明治九年、「茶場後碑」を撰述した。

○重野安繹　文政十（一八二七）年から明治四十三（一九〇一）年。鹿児島藩士の生まれ。嘉永元（一八四八）年、江戸の昌平黌の生徒となり、塩谷宕陰・安井息軒などに学ぶ。維新後は学問世界に進み、『大日本編年史』編纂に参加するなど修史事業にたずさわり、実証主義的な歴史学を唱道した。学士院会員となり、帝国大学教授などを歴任。著書に、『成斎文初集』『重野博士史学論文集』などがある。

○松本英一　明治二十六（一八九三）年から昭和四十六（一九七一）年。愛媛県伯方島生まれ。本名が英一、字は子華等、号は芳翠。日下部東作らに学ぶ。昭和三（一九二八）年には、のちの日本書道美術院となる、戊辰書道会を創立、理事となる。同三十三（一九五八）年に日展評議員、同四十六（一九七一）年には日本芸術院会員に就任している。本碑文を書いたのは四十四歳のとき。

**●注**

○歳乙酉　明治十八（一八八五）年。

○文書採訪　国史を編纂するためには、古文書類の第一次資料の収集が欠かせないとの判断から、重野は明治十八年に「古文書採訪」を建議する。採訪とは探訪し、採集すること。この議は認められ、同年、先ず重野自身が関東二県に出張して古文書を採訪した（西村時彦「成斎先生行状資料」『重野博士史学論文集』上、雄山閣、一九三八）。この関東二県のうちひとつが埼玉県なのであろう。

○關左八州　關左は関東。南面すれば東は左。前掲の西村によれば、八州をくまなく回っ

たのではなく、二県のみ。
○茶場　茶業農場くらいの意味であろう。農場とは、茶葉の生産だけではなく、その精製・保存、製品としての出荷までをトータルに扱う。
○阜　小山、おか。
○狭山　狭山丘陵。
○其麓宮寺郷　丘陵の北麓。
○金子山　加治丘陵の一部。
○其麓金子郷　丘陵の南麓。
○人戸　民戸。世帯。
○瀹　煮る。
○洋人　欧米人。
○冒　名乗る。なりすます、名をかたるの意味だが、ここではそれほど強い意味は無く、「狭山を名乗っている」くらいのニュアンスではないか。
○畿甸　もと畿は、王城周辺の地域で、甸は、さらにその周辺の地域。ここでは畿内と同じく、今の近畿地方。
○海内　もと晦内で、天下。日本では、海内で、日本国内。
○入間　入間川。武甲山系東南部を源流とし、東流して川越の東で荒川と合流する。金子山の西北を流れる。
○多摩　多摩川。東京・埼玉・山梨の境あたりを源流とし、東南に流れて海に注ぐ。
○左右　ここでは、そば、かたわらの意味だろう。
○御嶽山脈　御嶽山は、木曽山脈の中に位置するが、木曽山脈自身は南北に伸びる。御嶽山から東に伸びて秩父に至る山脈があるわけではない。ここは、地理的な視点はあいまいで、甲武信ヶ岳を含む関東山地の山塊から秩父の武甲山まで山地が続いていることを言っているのであろう。
○秩父　武甲山だろう。
○平野三四里、至河越　武甲山から川越までが、約三十五キロ。
○沃　肥えた土地。
○泉　泉水、川の水。
○水靄　靄は、もや。水靄で、霧、もや、水蒸気だろう。
○晻曖　暗いさま、だが、霧や靄が立ちこめて薄暗い、だろう。
○嘗　こころみる。
○攷　考察する。
○培養　栽培。
○五畿　五畿内。大和・山城・和泉・河内・摂津。
○八道　畿内と七道（東海道・東山道・北陸道・山陰道・山陽道・南海道・西海道）をあわせた称。当時すでに北海道は存在したので、畿内を除いて北海道を入れて「八」とするのかもしれない。いずれにせよ「五畿八道」で日本全国。
○中外　国内と国外。
○亦不可知　どうであるか、どうなるかは分からない。
○宇治之茶、剏于七百年前　禅僧栄西が建久二（一一九一）年にはじめて茶の種を日本にもたらしたとされる。そしてその弟子の高弁が、栂尾高山寺や河越にお茶を蒔いたとされ

る。栄西の帰国からこの碑文の撰述まで、六九六年、約七百年。
○狭山繼之　前掲の高弁による河越蒔茶を言うのだろう。ただし、ここでいう「河越」が今のどこにあたるかは明かではない。
○中間衰廃　狭山茶の歴史を述べる「重闢茶場碑」は「歳月之久、茶戸衰替、佳種蕪没於灌莽深荊之間矣（しかし、歳月が長く経つ内に、茶業に携わる農家は衰え廃れ、よい種株も茂った草木や深い荊の中に埋没してしまった）」と記す。
○其再興又在百許年　「重闢茶場碑」によれば、茶場の再興は文政元（一八一八）年ごろ。この碑文撰述まで、六十九年。実際に茶場開設に至るまで一定の準備期間があったろう。
○殖産　産業を盛んにすること。
○建之其山上　実際は、狭山丘陵北麓の出雲祝神社境内。
○近　中村敬宇撰文の「茶場後碑」建立は明治九年。
○刻余文其山麓　「はじめに」で述べたように、重野の碑文は完成しており、貞石も用意できていたようであるが、ちょうど茶業が衰退に向かった時期にあたってしまい、碑文を石に刻むに至らなかった。
○辭　文体の名で、韻文の一種。辞賦ともいい、楚辞と漢代の賦を淵源とする。おおむね文字数が奇数の句からなり「兮」という意味を持たない文字を含ませる。碑文では、散文で事柄を客観的に述べる碑記だけではなく、「墓碑銘」やこの碑の「辞」のように叙情的にうたう韻文を書き添えることがよく行われる。
○武之野兮名於月　武蔵の平野は茫漠と広がっており、昔から月とともに詠じられることが多かった。「行く末は空もひとつの武蔵野に草の原より出づる月かげ（九条良経）」「ながむべし霜に枯れゆく武蔵野の露の名残に宿る月影（慈円）」など。
○武之山　武甲山。
○武尊　日本武尊。
○略　巡察する。「新編武蔵風土記稿」（秩父郡之九）に「武甲山……【大和本紀】に、日本武尊此山を美（ほめ）て、其勢ひ勇者の怒立が如しとのたまひ、雁阪より直に此山に登りましまして、東征の御祝禱として、兵具を巖蔵に納埋みたまう」とある。日本武尊が、東征の折、武甲山に登って祭り、甲冑を奉納したという話が伝わっている。武甲の名もこれに由来するという説もある。
○曠莫　莫は、漠。曠莫は、広大なさま。
○嘉卉　美しい、よい草木。「詩経」小雅四月に「山有嘉卉、侯栗侯梅（山に美しい草木が生えている、しかし、栗や梅の木の下にある（ので履まれてしまう））」とある。
○茁　植物が土から芽を出し始めたさま。茁茁は、すくすく。
○嵂崒　山が高くそびえるさま。
○靈泉　泉の美称。不思議なききめのある泉。
○洌　水が澄んでいるさま。
○盧　盧仝。生年不明。八三五年没。唐の范陽（河北省）の人。号は玉川子。学を好み博覧で、詩に巧みであった。仕官の意志がなく、嵩山の少室山に隠棲した。性、茶を好み「走筆謝孟諫議寄新茶」（「全唐詩」巻三八八）の詩は、「七碗茶歌（詩）」として知られ、お茶の味わいと効能とを歌ったものとして後世に伝えられた。「一碗喉吻潤（一杯目は喉を潤し）」から始まり、「五碗肌骨清（五杯目では皮膚や骨が清らかに

なり)」「六椀仙霊（六杯目では神仙に通じる）」とし、「七碗吃不得也（七杯目は飲めなかった）」としている。「新唐書」巻一七六本伝。
○陸　陸羽。生年不明、八〇四年没。唐の復州竟陵（湖北省）の人。別名、疾。字は鴻漸、季疵。出自不明で、上元初年（七六〇）頃、苕渓（浙江省）のほとりに廬を結んで文人達と交流したが、仕官はしなかった。茶を好み「茶経」三巻がある。茶道の元祖とされ、神格化されている。「新唐書」巻一九六本伝。
○饜　あきるほど満足する。狭山の茶が良質なので、茶神ともいうべき盧仝や陸羽もそれを飲んでは満足するだろう、ということ。
○嗜欲　体が発する欲望。ここでは、お茶を飲みたいという欲望。
○猗　猗頓。春秋時代の魯の人で、製塩業で成功し、王者に匹敵する富を築いた。「猗頓之富」は巨万の富を表す。
○卓　卓王孫。秦から前漢。もと趙の人。始皇帝が天下を統一すると、各地の富豪などを関中などへ強制移住させた。卓王孫は自ら望んで蜀（四川省）へ移り、そこで製鉄業を営み成果をあげ、大事業家となった。
○貨之殖　貨殖。財産を増やす。富豪。狭山の茶業は成功し、あの大実業家で富豪の猗頓や卓王孫なみの富を築いている、ということ。
○帝闕　闕は、闕の俗字。帝闕は、宮城の門。転じて宮城そのもの。
○咫尺　一尺。短い距離の形容。狭山が、宮城（帝都）から近いことを言う。近ければ、皇室や政府との関係も近しいものとなりやすく、事業を行うのに有利である。
○巨罍　罍は、奥。入り組んだところ、くま。ここでは港湾。巨罍とは、海外貿易の要である横浜港を指す。
○飈疾　飈は、つむじ風。飈疾で、つむじ風のように速く走る。
○車　蒸気機関車だろう。
○電撃　稲妻のようにすばやく攻撃すること。ここでは稲妻のように速いこと。
○服　車箱。

## ●口語訳

【題名と題額揮毫者】
北狭山茶場碑。
従二位勲一等伯爵清浦奎吾が題額を書した。

【古文書採訪で武蔵歴訪】
明治十八年、わたしは、国史編纂の基礎である「古文書の探求採集」を命じられ、埼玉県を含む関東二県を巡歴した。
武蔵の川越から、西南方向に入間川を遡って、八王子まで至った。
するとその途上、一面見渡す限り、茶畑が広がっているところがあった。聞いてみると、こここそ「狭山茶場」であった。

【狭山のふたつの郷村】
ふたつの長い丘陵が、向かい合って並んでいる。
南側のものを狭山（狭山丘陵）といい、その北麓の宮寺郷に十あまりの農村がある。
北側の丘陵を金子山（加治丘陵の一部）といい、その南麓の金子郷にもまた十あまりの

農村がある。
（両郷あわせて）二千世帯あまり、みな茶業を生業としている。
この地域を総称して「狭山」という。

【銘茶狭山茶】

狭山産の茶葉は、煮出すと緑色のお茶が出る。
欧米人がこのお茶を最も愛好している。
「緑茶」とよんでいる。
そして、関東でとれるお茶で、海外に輸出されるものは、多くは「狭山茶」の名前を冠している（狭山産でないものも「狭山茶」と銘打っている）。
それは日本国内に流通している近畿地方産のお茶が「宇治茶」と銘打っているのと同じである。

【金子郷からの碑文の依頼】

実はわたくし重野は、以前、金子郷の茶業者の某から、茶場の碑の碑文を書くよう依頼されたことがあった。そして承諾はしていたものの、まだ書き出すことができないでいた。

【茶業にふさわしい狭山の地理的条件】

それが、この明治十八年に至って、たまたま狭山を通りかかり、茶場が盛んであることをこの目で見ることになった。
さらにまた狭山の地形をじっくり観察してみると、入間川と多摩川の二つの流れが、この地域のかたわらを流れている。
後方は、甲斐武蔵にまたがる関東山地の山塊が、秩父武甲山に連なっており、そこから前面（東側になる）は平野が三十五㌔あまり広がり、だんだんと低くなりながら川越まで下っている。この間、土壌は肥沃で、水は清らか、水面から立ち上る靄や霧で空気は湿気をたっぷりと含んで湿潤である。
かくして、狭山が銘茶を産出する地理的な条件を備えていることが分かるのである。

【茶業の隆盛は、栽培製造の工夫から】

しかし、こうも考えてみた。
我が国は、どの地域でも、おおむね茶の栽培に適しており、実際にお茶を生産している。ただ茶の栽培と製茶の方法が異なっているため、品質の高下が生じているに過ぎないのではないか。
もしそうではなく、地形土性だけが良いお茶を産する条件だと言うのならば、日本全国に、地形や土壌の質が宇治狭山に似ているものが無いとでも言うのか。いやそうではなく、宇治狭山に似た条件の地域はたくさんある。
だから、宇治狭山が、国内の他の地域から抜きん出て銘茶のトップである理由は、茶の栽培と製茶の方法がよろしきを得ているからなのである。
もしも他の地域の茶場が、宇治狭山のように栽培と製茶の方法の開発改良に力を尽くし、何年もそれを続けて成果を上げることになれば、銘茶としての名誉を国内外に認められることにおいて、宇治狭山に劣らないものとなるかもしれない。
また宇治狭山が、現在の状況に安住してしまい、栽培と製茶の方法のさらなる向上への努力を怠ってしまうならば、そのお茶の評価は、たちまちのうちに他の地域よりも下位におちてしまうことも、ないとは言えないだろう。

【改善の努力の歴史が銘茶を生む】

思うに、宇治茶は七百年前の高弁の時代に始まった。（そして製茶を継続してきた）。
狭山（河越）もそれに続いたが、やがて衰退してしまい、茶業が廃れた。
それが百年ほどまえに再興され、改良の努力が続けられて、ついに今日の隆盛を迎えているわけである。
産業を興し続けることの難しさは、このようである。
こういう諺がある「成就させることは難しいが、壊すのは簡単だ」と。全くそのとおりではなかろうか。

【宮寺郷の建碑と金子郷の試み】

その昔の天保年間、宮寺郷の人々は、昌平黌教授の林復斎に碑文の撰述を依頼し、石碑を狭山丘陵に建立した。
また近年になって、別の石碑を作った。中村正直氏に碑文を依頼し、前の石碑と前後ならんで建てられた。
ここに至って、金子郷の人々も、自分たちも石碑を作ろうと思い立ち、わたくしに依頼した碑文を石に刻み、その石碑を金子山に建てた。これを「北狭山茶場の碑」と題する。

【二郷の競い合いによる発展】

宮寺金子の二郷は、どちらも狭山の中にある。
それはちょうど、大家の中に、祖先を同じくする家が複数あり、競い合って事業に取り組むことで、全体として「家名」を引き上げ、かつ、家の外からの侮りを防ぐようなものである。
二郷の人々よ、ライバルとして競いつつ、狭山茶の名を総体として更に高めるべく、努めていただきたい。
茶場の衰退と復興の理由や背景、またわが狭山茶が海外で大いに高い評価を受けてよく売れている理由については、林・中村両氏の文にあまねく記されている。だから同じことをここで繰り返すことは避け、狭山茶場をうたう「辞」を以て結びとする。

【辞】

「北狭山茶場辞」

武蔵の野は月で有名で、
武蔵の山、武甲山は、日本武尊が巡察したという。
（そのように、武蔵の国は、古くからその名を知られているのだが、）
いま、この平野は広々としていて、よい草木が芽吹き、
山は高くそびえており、その麓にはきれいな泉が湧いている。
泉の水は清らかで、（その水で潤された）土壌は肥沃であり、
そこに生えるお茶の葉は、鮮やかな緑色で、馥郁たる芳香をただよわせる。
狭山のお茶は、とても良質で、茶神の盧仝や陸羽も、飽きるほど喫しては満足し、
狭山の茶業は、大成功を収めており、猗頓や卓王孫なみの富を築いている
この地は、帝都からとても近いという地の利を得ており、
すぐ目の前の大港湾である横浜港には、外国へお茶を輸出する貨物船が見える。
馬車はつむじ風のように駆け、機関車も稲妻のように速く走って茶箱をどんどん運ぶ。
千箱万箱の単位で狭山茶は出荷され、これからも極まることはない。

明治二十年十二月、

正四位勲四等文學博士重野安繹が撰述した。
昭和十一年十月、この碑を建てた。
松本英一が書した。

## 三、参考資料

**①本文翻刻**

・入間市『入間市史』中世史料・金石文編（一九八三）

**②訓読ならびに解説**

・大護八郎、埼玉県茶業協会著『狭山茶業史』（埼玉県茶業協会、一九七三）。

**③同文**

・「成斎文集」二集（冨山房、一九一一）所収

**④関連碑文**

・宮寺「重闢茶塲碑」（「入間〇二」）
・宮寺「狭山茶塲碑」（「入間〇三」）
・金子「茶塲後碑」（「入間〇四」）
・瑞穂「狭山茶場之碑」（「東京〇一」）

以上

二〇二四年七月　薄井俊二訳す

（背面）

金子郷は所謂狭山茶の發祥地にして茶場の開拓は遠く數百年の久しきに係るといふ郷の有志夙に碑を建て之を記せんと欲し時の大家佐藤一齋翁に請ひ文を獲たりき然るに如何なる事情の起りけむ其稿遂に建碑に至らすして已みたり明治維新に及ひ郷の茶戸相謀りて頼母子講を結ひ茶市を開き資を醵し以て前楮を繼かんとし先つ石材を伊豆の根布川に求め更に文を野村素軒翁に請ひたりしか故ありて復果すこと能はさりき降て明治十七年の頃郷人小澤槐陰重野成齋博士と相識り碑記の撰を博士に囑す年を踰えて文成る此碑に記す所のもの即是なり然るに嘗時適々斯業衰頽の極に達し建碑の擧亦復頓挫せり識者深く之を憾とす輓近斯業再ひ興り聲價亦漸く隆なるに會ふ郷人中島幸太郎同志と議し檄を飛はして江湖の協賛を仰き拮据經營以て茲にこれか完成を見るに至れり嗚呼回顧すれは其經過實に八十有餘年先人の宿志始めて達す豈悦はしからすや因つて其由來を叙し碑陰に記すといふ

昭和十二年三月　北狄山茶場碑建設會　　華堂清水書印

賛助芳名等

略